中国新聞　広島版　二〇〇八・〇一・一九

ひろしま歴史回廊

第12部・近世の自然と暮らし⑩

そして今　燃料革命で環境一変

本シリーズでは、人間活動の活発化が、江戸時代においても地域の動物相や林野植生に大きな影響を与えたことを見てきた。最後に、その後の歩みや現在とのかかわりについても考えておきたい。

■薪炭林やめ植林も

中国山地のたたら製鉄は大正期に使命を終えたが、木炭による製鉄は別の方法で戦後もしばらく続いた。今でも山で耳にするのは、ダイナマイトでブナの大木を割って炭に焼いた話であったりする。

一方、水田中心の村々で、柴草山から草肥を取らなくなったのはいつごろか、それを覚えている人はもう少ない。しかし島々では、肥料にする大阪ゴミがきたことを覚えている人は多い。豊かな緑は、戦後もなかなか回復しなかった。

林野の変化は、やはり昭和三十年代の燃料革命が画期のようである。石油の利用がエネルギーの中心となったとき、林野のあり方は一変し、薪炭林をやめてスギ、ヒノキの植林も可能になった。しかもたちまち外材の輸入に向かう。

■イノシシ再び活動

今では林野は放棄されたに等しく、江戸時代よりも樹木が茂っているようである。イノシシも再び活発な活動を始めた。目の前の自然は回復しつつあるようにも見えるが、それを可能にしたのは、皮肉なことに石油の大量消費であった。

昔の人々も、暮らしを立てるために身の回りの自然を徹底的に利用し、資源の枯渇、時に災害のしっぺがえしも受けたが、今思えばなお人力の及ぶ範囲内であった。

現在は圧倒的な技術力で便利なくらしを実現したが、地球温暖化や化学物質による汚染など、比較にならない環境の悪化が進んでいる。それは目に見えにくく、対策もより困難に思える。

人間が何をしてきたのか、今後の環境対策を考えるうえでも、過去をしっかり見据えておきたいと思う。本稿の意図もそのささやかな試みにある。（広島大教授・佐竹昭）

土曜日に掲載します

「近世の自然と暮らし」は終わります。次回から「広島城天守閣物語」を掲載します。

早春の比婆山・池の段を西から望む。自然林と植林地の対比が鮮やか